

平成29年4月1日

日本小学生バレーボール連盟審判委員会

■平成29年5月14日（日）審判講習会報告

教育的指導の考え方と取り扱いについて

◆教育的指導の目的

子どもたちにバレーボールを継続して楽しんでもらうため、指導者や審判員は、試合を通して、ルールやマナーを伝えていくことが大切です。周りへの感謝の気持ちや、お互いがきもち気持ちよく試合ができるよう、フェアプレーを自ら考え、行動できる選手の育成につなげていきます。

- ・指導者と審判員が、子どもを育てていく。
- ・両監督は記録に名前を書く際に握手をする。
- ・試合終了後、監督は主審、副審と握手をする。

◆教育的指導の取り扱い

主審には、チームが罰則のレベルに達しないよう防ぐ義務があります。

教育的指導は、試合中、選手（子ども）に2回目の不正な行為をさせないための指導です。

- ・選手が相手チームに向かってガッツポーズ、ボールを打ったり、投げつけて返球、ゲームキャプテン以外の選手が主審に抗議、線審に対しての抗議等を行った場合等、それぞれの事象ごとにステージ0を与える。（ステージ0は子どもだけ）
同じ行為をした場合はステージ1でイエローカードに
- ・主審は、最初に不正な行為が起きた時点で吹笛し、選手に注意します。その後、両チームのゲームキャプテンを審判台下に呼び、注意した行為について説明し、指導します。
- ・教育的指導は、試合において主審からゲームキャプテンに行われますが、副審も主審の指導内容を一緒に聞き、必ず監督に伝えます。
 - ・ゲームキャプテンは、主審から注意した行為の説明を選手に伝えたら、主審に向かって手を挙げます。
 - ・副審は注意をした行為の説明を両監督に伝えます。両監督は主審に向かって了解したことで手を挙げます。
- ・教育指導は、事象ごとに両チーム1回のみです。
 - ・監督、コーチは、ステージ0は無く一般と同じ。すぐにイエロー、レッド。
 - ・暴言、主審・副審・線審への抗議、コーチ・マネージャーが椅子から立ち上がる。

その他の取り扱いについて

速やかに次のサーバーにボールを送ることや、靴ひもが解けたら直ちに結ぶなど、ゲームの流れを止めないで安全に試合ができるよう、事前にチームキャプテンに伝え、確認しておきます。子どもたちの安全の配慮から、試合に影響の無い程度で、靴ひもは積極的に結ばせます。

- ・コイントスの前に、主審が「ゲームキャプテンにボールを送ること、靴ひもが解けたら主審、副審に伝えること」を説明する。
- ・靴ひもが解けたことがわかった場合は、主審、副審は吹笛して試合を止めることができる。(子どもがけがをすることを未然に防ぐため)
- ・監督、ベンチスタッフも靴ひもが解けた場合は、主審、副審に伝えることができる。
- ・選手がぶつかったり、のぼせて鼻血が出た場合。ゲームを止めて治療の処置を行う。捻挫も同じ。主審が気づかない場合は副審が吹笛してもよい。
※ただしコンタクトが外れた場合は、これに該当しない。
処置は、選手の治療、床の血を拭くこと。
- ・監督は、治療行為を行った後、選手交代を行い、速やかに試合を行う。
ただし選手が6人しかいない場合は、レフリースタイル3分を行う。
4, 5分で治療が可能なら待ってもよい。ただし10分以上はできない。(日小連)

◆サーブについて (ロングサーブ)

サーブを打つ前に、サーバーの間違えを記録員が確認した場合は、チームに間違いを伝える。正しいサーバーがわからない場合は、ゲームキャプテンは副審に番号の確認をすることができます。間違えて打った場合はローテーションの反則となります。

記録員がサーブ順の間違いがなく手を挙げて、主審が吹笛した後に、サーブを打つ前にサーブ順が間違っていたと気づいた場合は、8秒ルールは適用しないで、サーブの選手が交代してから再度吹笛する。

ただし、間違えてサーブを打ってしまった場合は、サーブ順のミスとして処理する。この場合、相手チームから記録員が手を挙げたとしても、あくまでもミスとする。(手を挙げる行為はルールブックにはなく。新潟県だけの特別ルール)

◆ブロックについて

ブロックでジャンプしても白帯より下でボールに触った場合は、レシーブとみなす。
(ネットから離れてブロックして、白帯より下の場合も)

◆ベンチでの行為

- ・ベンチでの、足組み、腕組みはOK。ただし、ふんぞりかえったり、椅子に片肘をつくなどの不快な行為に対しては、副審が注意する。
- ・タイムあけは、速やかに選手はコートに入る。吹笛後の監督等とのハイタッチなどは遅延行為とみなす。